

おおよまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成20年
7月号
通巻455号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

発行日 平成20年7月23日
発行所 大倭出版局
〒631 0042 奈良市大倭町1の12
電話 (0742) 44 0015
印刷 大倭印刷
定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
振替口座 01050 6 67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



鹿嶋神社の母子獅子 青森県弘前市 石田勝利さん撮影(文・6頁)

昭和38(1963)年7月23日 月次祭法話より

切り離せない先祖と子孫の繋がり

法主 矢追 日聖 (満51歳)

薄らいできた宗教行事

こうして夏は毎年巡って来るんですけども、今年の夏は、ことのほか厳しゅうございます。どうか皆さんも、先ず自分の健康という事に最も気をつけていただきたいと思えます。

暑くなつてまいりますと、関東の方では七月の半ば、関西の方では一ヶ月遅れて八月の十五日頃がお盆の行事となっております。そういうような仏教の行事や、神社関係におきまして、あちらこちらで夏のお祭りが行われております。しかし、どうも最近のそうした色々な行事というものは、何かしらその宗教性を離れ、本当の宗教的な行事という意味が、だんだんと薄らいで来たような感じを受けるんです。

お盆のこの時期にはほとんどどこでも、ご先祖の回向供養とかをされているんですけども、これも本来なら宗教上においてかなり重要なものだと思います。

宗教の問題は、人から問われたり求められて話をするのが順序です。そうやって求める場合に、本当の事を掴めるといふ事になるんです。その点において最近の大倭の信者さん達の気持ちを考えてみますと、昔から——昔と申しましても終戦直後の話ですが——比較してみますと、今日では割合に進歩の跡がみえます。最初の頃は、やはり自分自身のご利益や病気という事で神様を求めるといふよ

うな人が多かつたんですね。ところがここ四、五年前頃から、段々と本当の宗教を求めて来る者もかなり増えて来たんです。

その中にはまた、人間各自が生まれつき持つております霊的な能力を、顕著に発揮したいという方もいます。自発的に自分の霊力が出てくるという事は、その人間個人を向上させて行くうえにおいて大きな力がある。だから、そういう方面から大倭へ来られる方も沢山おられますが、要するに人間個人を治める力を、自分で養成して行くためなんです。そして今よりも人間的に向上していくという、非常に崇高な道を求めておいでになる方が日増しに増えて来ているんです。

大倭としての出発当初に私が希望しておつたその時期が、ぼつぼつ近づいて来たんじゃないかと思つて、喜んでる訳です。

勢力を争いがちな日本の宗教

日本人の癖は、自分の信仰している宗教というものには唯一絶対であると考えます。これはいい事なんです。唯一絶対的な宗教であると自分が信じるからこそ、その宗教によって自分達が安心して生きる力を与えられているという事になる。これは当然の事であります。それは非常に尊いんですが、その反面、自分が信じている宗教以外の宗教は全部価値のない、或いは低級な、悪い言葉で言えば邪教であるという気持ちを持つ人が多い。一つの宗教に対して、非常に一生懸命に信仰している人が、自分の信仰している宗教以外の事について罵倒するという現象が、日本には非常に顕著に出て来ているんです。

こういう信仰のあり方というのは、喜ばしいものではない。自分が信じている宗教が尊ければ、

相手が信じている宗教もまた、相手の人の気持ちになつてみれば非常に尊いはずですね。ところが日本人というのは、そこに非常に狭い見解をもつている。もの見方が小さく、言い換えれば島国根性丸出しというものが、宗教の世界に出てくるのは、随分情けない話です。

日本宗教の一番の欠陥というものは、宗教そのものの本質を教えないで、単なる宗派、教派、或いは教団というか、宗教団体に囚われやすい事なんです。宗教対宗教の問題じゃなくして、一つの宗教団体と宗教団体を比べて、こっちが正教であつちが邪教だというような勢力争いをする。宗教として最も見苦しい姿なんです。

神様の心というものはそんなもんじゃない。私がつつも申しておりますように、大倭の宗教のあり方というものは、天地自然の大神様の心の通りに今日までの歩み方をしているという事です。神様の心に沿つた宗教であると、これだけは私は自信をもつて皆さん方に言い切れると思うんです。

人間個人として考えてみた場合には、この矢追日聖という個人は、あちらこちら欠陥だらけだろうと思います。本質的な人間論からいきますと、かなり欠点の多い人間ではありまけれども、自分として非常に優越感を感じている事は、自分が正直であるという事だけです。今日まで、心のままに自己を偽らないで生かさせてもらった。そして出来るだけ神様の心に沿つた宗教として大倭を育て上げて来た。私のこの気持ちは、自惚れかも知らんけれども自信満々なんです。これは神様の前でも皆さんの前でも、公言してはばからん事なんです。

このように断言するという事には、そこにまた一つの尺度があるからです。大倭の尺度でもつて、宗教団体や宗教家がやっている現実の色々な方法

論を見た時にかなり違っている点があるんです。

囲いを作らない神様の心

先ほど申しましたように、自分が信じている宗教が一番いいんだと思う者は、自分以外の宗教は全部悪いという気持ちになるという事と、自分達が信じている一つの宗派とか教派に囚われるという気持ちは、先ず神様の心に沿っていない。

信者名簿に登録し、また脱退する時には脱退届けを出す。次には信者であるという証しに、例えば十円とか五十円とか毎月教団に納める。これは現代の宗教としての常識の問題なんですけれども、これもまた神様の心に沿わない。こうしておかなきゃ信者が減るとか、こういうような方法を取つたら信者が増えるとか、人間の心でもつて信者を扱うという事もまた神様の心に沿わない。

神様の心というものは囲いを作らないという事です。「来る者を拒まず、去る者を追わず」なんです。だから大倭に何年も前からおいでになる方も、或いは今日初めておいでになつた方も、平等に同じ気持ちで私の方は扱っているんです。

大倭の宗教というものは神ながらの宗教ですから、自然の成り行きにまかしてやっていると、人間的な考えをあまり加えないというのが私の行き方です。まあ今日まで長年おいでになつて居る方が、大倭の行き方というものをよくご存知だと思つて居るんです。

もし私が世間の宗教家がやっているような真似をした場合、私は人間として生きる価値がないんですから、もう早い事、霊界に引き取られるだろうと思ひます。けれど今のところ何とか神様の心に沿つた行き方しておりますから、こうして健康で生かさせてもらつて居る。これは非常に喜ば

しい事です。

先祖と一体となっている体

先祖と子孫というものはみな血で繋がっているんです。

仏壇焼いたら先祖さん焼いたとか、位牌捨てたら先祖さん捨てたと言う人が沢山いるんですね。これはもう実に馬鹿げた話です。先祖さんの物質的なものは、子孫の肉体の中に持っている。例えば先祖さんの焼いた骨(こつ)をお寺に供えたり、どこかの本山に納めるとか言って骨をみなあつちこつち提げて歩きます。けれども、そんな大層な事しなくたって、生きてる子孫の肉体の中に、火葬場で焼いた骨以上の立派な物が入ってるんですよ。焼いた骨を引提げて、これが先祖の骨やなんて言うてるのはおかしいんですね。それよりもっと現実的に、生きた骨がここに歩いてる事に誰も気がつかないんです。

血の中に先祖さんの骨が生きてるんです。その血という物質でもって繋がって来ているものが、現在生きてる子孫なんです。それはもう一つ靈魂でも繋がれていて、別々の存在ではないんです。私が何処へ歩きましたも、やはり矢追の歴代の御霊(みたま)というものが、私のこの肉体の中でうじゃうじゃ動いています。仏壇や墓がなくても、私のこの肉体の中には矢追の五十代の先祖がみな入っているんですね。

皆さんも同じ事なんです。皆さんは先祖さんの骨を持って歩いてる。そうした先祖と子孫という関係は、靈魂から見ても肉体から見ても、切離す事は出来ない存在なんです。

仏壇に祀っている位牌があった場合には、これは先祖さんだと考える。だから何か珍しい物あつ

たら供えようと思います。これはいい事なんです。だけれど、先祖さんは自分の中に入っているんだから、食った方が早いんですよ。自分の体自身が仏壇になっているんだからね。神様にとか先祖さんにと言うけれど、結局自分が後で食つとるんですね。それでいいんですよ。子孫の者が食つたら、先祖さんが食っているのと一緒になるんです。それでちゃんと先祖さんに通じている。

先祖は西方十万億度の阿弥陀さんの浄土にいるんやとか、人間世界からずつと離れた霊界のどこか隅っこにいるとかいう考え方が、最もいけない考え方です。

生きてる骨は自分が持っているんだから、一番先祖さんに近いんですよ。そして先祖の御霊というものは、我々の身辺にみな集まって来て、一緒に生活しているんですね。肉体の無い人間として、我々家族の中にいるんですよ。

大倭の教えというものを信じておられる方は、先祖さんと子孫という関係を身近に考えてほしいと思う。わざわざ別の器に入れて仏壇まで持って行かなくても、食膳でご飯いただく時に、ポンポンと拍手打って拜んで、食べればいいんですよ。先祖さんと子孫というものが同居している気持ちに成りきつたら、出来るはずですよ。

我々は肉体を持っていて、肉体の中に靈魂が入っています。その靈魂と、先祖の霊体というものは、同じ世界で住まいをしているんですよ。たまたま肉体を持っていてと霊界がわからないというようになりませんが、我々の靈魂も、死んだ先祖さんの靈魂も同じ霊なんです。

生きてる皆さんの靈魂も、人間世界に半分、霊界に半分、足を突っ込んで霊界と現界の間をしょつちゅう行き来して交流しています。人間の世界にいるんだから、死んだ人の世界とは縁が切れ

ているという訳ではないんです。

そして霊界の事がよくわかる人というのは、霊界の方へ余計に足を突っ込んでいて、霊界へさつと遊びに行ける立場だというだけです。

回向という言葉の意味

先祖さんの供養をするという事を説明するのに、仏教では「回向供養」という言葉を使っているんですね。坊さんはどのように解釈するのか知りませんが、私は霊界を見ているからその言葉の文字の意味がわかります。

先ほどの、先祖さんと自分は一つの家庭の中に生活しているんだという考えのもとに、この「回向」という言葉を考えると、これは非常に味のある言葉です。

現在生きてる人間が、お互い気持ちを融和して、穏やかで幸福な家庭を作っていると、先祖さんは非常に喜ばれる。そういう喜びの心を先祖の霊が持つと、その気持ちが今度は現界で生活している子孫の家庭の中に回ってくる。そうすれば、家庭がもっと明るく幸せになっていく。するとその喜びが、また先祖さんの所へ回って行く。向こうにむかつたと思つたら自分の所へ回って来ている。これを「回向」と言うんですね。まあ現在の言葉で言うと循環です。「回向」というのは、連鎖反応、循環を意味するんです。

逆に、しょつちゅう夫婦喧嘩はするし親子の仲は悪い、隣近所の付き合いも良くないというような家庭がここにあつたとすると、その姿を先祖が見たら、ああ自分の子孫は情けないという事になるんですね。実際、そうした時に苦しむと言ってる先祖さんが沢山います。その中には生きとつた時に人を泣かしたり騙したり、そんな悪い因縁を

積んで死んだ先祖さんもいるんですよ。そんな人が霊界に入ったら勿論苦しむ。苦しんだり情けないなあと思う気持ち、今度はずうっと回って家庭の方へ来る。そうすると何でも無い事に、お互い気が立って喧嘩が起るし、子供の頭を殴るとなってるわけですよ。家庭の中のいざこざが、また回って先祖さんの方でも修羅道になっている。そういう場合は悪循環となってる、その家はさっぱりうまく行かんようになるんですよ。

神様の心に近づくと信仰

これは過去世の因縁によって起こるんだけれども、人間という者は向上する力があり、人間は万物の霊長であり理解する力があるはずですよ。

だから、いろんな問題が家の中で起こって来て、もう喉から手が出るほど腹立っても、自分で歯を食いしばって収めていく。喧嘩しなくなっても喧嘩しないようにする。個性というものはなかなか曲げられるものじゃないんですよ。だけれども家の中が円満にいくように、信仰の力によってそれを曲げるんですよ。

仮に悪い因縁の人間が集まっておつても、みんなが円満になるように努める。そうすれば先祖の因縁も段々と解消していく。神さん仏さんに願かけて拜んでも、お経上げてもらっても、そんな事で因縁解消は出来ない。因縁因果の法則からいっても絶対に出来ないんですよ。生きている我々が、先ずそうした悪因縁をなくするという事が、先祖の悪因縁を解消する方法という事になる。

いかなる事があっても、いかなる相手であつても、自分の我ががいうものを出来るだけ無くするようにする。仏教で言うところの「自我忘却」の精神ですね。そりゃ一遍にはいきませんよ。何年か

かつても構わない。死ぬまでかかっても構わないんですよ。人間個人の向上を図る事によって、自分の悪因縁も解消出来れば、それはまた自分達の先祖の色んな因縁は解消出来るんだという事です。大倭の宗教の根本は、先ずは自己です。我々は天地自然界から生かされているという事を自覚して、自分の魂そのものが天地自然の神の心に近づいて行くように日々努める事、これが真面目な信仰の態度なんですよ。皆さん方も、そういうつもりで大倭においての信仰を続けてほしいと思います。

(文責・編集部)

平成20年5月18日
第298回大倭会文化行事報告

大阪中之島「適塾」

湯浅 芳郎

新緑の中之島中央公会堂に24名の参加者が集まる。まず、中之島倶楽部で昼食会。この建物は、大正7年に完成したネオルネッサンス様式のもの。次に「適塾」に歩いて向かう。建物西側の史跡公園にて勉強会。入館して、ビデオを見る。

「適塾」は西洋医学の研究を始めとして、種痘事業やコレラ治療などの大きな業績を残し、また近代日本の建設に携わる幾多の英才を育てた。当時の大阪蘭学の水準は高く、多数の学者によって根強い伝統が築かれていたが、緒方洪庵はその伝統をさらに発展させた。幸いに建物は戦災もまぬがれ、現在、国指定重要文化財である。

洪庵は1810年(文化7)岡山足守藩に生まれ、父の大阪蔵屋敷留守居役に従い上阪、オランダ医学を学ぶ。そして1838年「適塾」を開く。日本語で書かれた最初の病理学書『病学通論』

を著わした。「人のために生活して己のために生活せざるを医業の本体とす」を生活信条とした。

塾は医学塾と語学塾である。学风は「厳格と寛容」、多数の民間医を養成し、塾生最大60〜70名起居、塾生3,000人に及び草莽の洋学拡大に繋がった。この系列は阪大医学部につながる。これらの功績の陰に夫人八重さんの助力が大きい。子供13人、塾生の面倒を精力的にみたと言つ。塾生は青森、沖繩を除く全国から。各地に散つて地域の医学や改革の中心として活躍した。入門者は 山口(長州)56人、岡山46人、佐賀34人と続く。主な塾生は福沢諭吉(大分)、村田蔵六(大村益次郎・山口)、橋本左内(福井)大鳥圭介(赤穂)、菊池秋坪(箕作秋坪・岡山)など錚々たる人物が並ぶ。

幕末という時代を考へてみるに、こんな小さな塾(90坪の学校)から時代を引っ張る多数の人物が出ている。今の学校は何をしているのかという感が強い。要するに公的な大きなものには、時代を変える力は内在しないことを、歴史が教えているのではないが、少なくとも、時代を変える力を支えているものは、小さくて私的なものである。また、「地方の豊かさ」の評価の再認識も必要で



野 保夫さん写

ある。明治維新という時代の激変にも、外国勢にも押されもせず対処できたのは、地方の文化レベルが相当高度であったからである。

今更ながら、この時代の志の高さ、濃い人間関係、女性の強さを想わざるを得ない。塾生が夜を徹して順番待ちをしたツアー蘭日辞書部屋、一人

SF的探求の物語 時空の謎

青森県弘前市 石田 勝利

最近いやに、一日が短く早く感じるようになって。けつして私一人だけではないはずだ。「若者には一日が早く一年が長く感じられ、老人には一日が長く一年が短く思えてくるもんですよ」と、よく言われてきた。成る程、あと半年で還暦、六十歳を目前に控えている私です。

しかし何かがおかしい、何かが変に思えて仕方がない。そもそも今、世間で問題になっている長寿に関する問題。十年前だと、百歳で百万円の賞金さえ出していたのだ。私の生まれた頃の寿命は五十歳、「還暦の祝い」はあった事はあったがほんの稀だった。あったとしても赤チャンチャンコを着せられた、ヨボヨボの爺さん婆さんのイメージより湧いてこない。この六十年程の時間に何が起きたのだらう。そもそも寿命とは何なのだらう。誰でも知っているようで知らない、これを探ってみよう。

書物から調べると——。人類最古にして書かれ未だにして世界のベストセラーを維持し続けている『旧約聖書』、今より三千年五百年前に神がモーゼに記述させたものです。その中の六章に、非常に短く数行で終わっている箇所、そのまま記すと。「さて地上では、人々がどんどん増えてきました。その頃のことです。霊の世界に住む者たちが、

一畳の塾生部屋に残る柱の刀傷が印象的でした。この後、近くの「適塾」の付属種痘所跡を廻る。ここには手塚治虫が曾祖父に当たる塾生、手塚良庵（茨城）を描いたマンガ『陽だまりの樹』の一場面が壁に描かれていた。

（岡山県真庭市美甘にて）

地上に住む美しい女を見せめ、それぞれ気に入つた女を妻にしてしまったのです。その有様を見て神様が言いました。『わたしの霊が人間のために汚されるのを放っておけない。人間はすっかり悪に染まっている。反省して、正しい道に帰れるように百二十年の猶予を与えよう』。ところで、霊の世界の悪い者たちが人間の女との間に子供をもうけていたところ……と書かれている。

私を長年、解釈に悩ませた箇所でもある。その道の先輩達に教えを求めても満足を得る解答は戻ってこない。単なる子供だましの創作話ではないのは、『モーゼ五書』をちよつと読んだならすぐ誰でも判る事だが、神がモーゼに書かせ、厳しく命令する事細かさは異常な程である。デタラメ、妄想は全く無いに等しい。何かしら伝えているはずである。日数、寸法、量は少々誤差を認めるも、寿命は、意外にも初代アダムから十代目のノアまでの寿命がやたらと長い。アダム九百五十歳、ノアが九百六十歳と、ほとんど千歳近くまで生き、ノアの息子達から「ノアの洪水」の後は五百・四百・二百・百二十四歳と、どんどん百二十歳へと近づいている。あの大洪水で一掃されると同時に何か封印されてしまったかと思われる何かがあるようで気になってはいた。

近頃になって、うつすらと私なりに解りかけてきた。それは「霊界」「神霊界」という時間の無い四次元の世界から、新たにもう一つの世界を創り出すのを試みたのではないだろうか。——それが三次元なる現代の姿。この出現で、短い人生を終えて「あの世」へ帰り、次の出生へと場所と時を決めて繰り返す。そういう輪廻転生を経る度に、魂が向上するのが自覚できる。時間を確認できる大きな喜びは、三次元ならではの事である。

この記憶は潜在意識として、DNAと言われるものに封印し続けられていた。しかし、ついに人類は見つけてしまった。見つけたどころか、使用方法をも解明して実用化し始めた。遺伝子組換え食物もその一つ。クローン技術、万能細胞……。この六十年程前から、四次元の世界に気付き始め、今やその頂点に向かっているのではないかと、それだけ存在のチャンスも延びているという事である。まさか遺伝子組換え食品を体内に摂り込んだ結果とは思いたくもないのだが、まだはっきりとは分からない。

§

もう一方、気になる文がある。

「汚された霊」「悪い霊たち」と、「神は自分の姿に似せた人を作った」。

この霊とは何なのでしょう。ここでの神・霊人とは異星人と置き換えれば、すっきりと物語にさえなる。ここでシナリオをつくり、物語ってみましよう。

——広大な宇宙には、数知れずの星団が存在していた。当然、星人達の間には先を争って移住計画が進められていた。水の惑星に魅力あるのは勿論の事。この地球を求めてあらゆる草木、魚類、哺乳類が持ち込まれた。といつても種子は地球上で

の遣伝子操作による増殖である。ついには自分の分身さえ作った。ところが作品が余りにも美しかった為、惚れ込んでしまい子供まで作ってしまった。それが他星人の作品であった為に二重の過ちを犯した。地上の女達は遣伝子(ついで)が異なつたので拒絶反応をおこしたのである。悪阻と苦痛の症状もその一つなのだ。星人達の協定により純粹種だけを残し、近々訪れる彗星を利用して地球を洗い清め、それを機に地球独自の世界を創る事にした。各星人達は、それぞれ純粹種だけ選び抜き、人類の遣伝子を二本にまで減らし三次元用に改良した。異星人との雑混種を避ける為である。

地球大異変の時は地底深く避難、あるいは宇宙空間、山上石室、おなじみの巨大箱舟と方法を考へ出して生き抜いた。そして地上に戻つた人類は、時間の存在する三次元で新世界を迎える事となった。

が、異星人が予想もしないアクシデントはあった。三次元を経験してないのだから無理もない。瞬時に意志伝達が出来ていたのが、残らず忘れてしまう。ノアの星人は、文字で記述を残し伝え続ける方法を教えた。この民が「選民」と言われるようになった由縁です。文字の記述があつたが為、人類の歴史が判り、時間の生まれた三次元にあつては一万五千年前頃の事です。

この時間の出現をうまく理解できないと、何億年前、何千年前という時間に永遠に悩み続けることになるのではないだろうか。

表紙写真について

本州最北端の、坂上田村麻呂の開基と伝えられる鹿嶋神社は毘沙門天を祀り、母子獅子を使っています。ほほえましく可愛いでしょう。五月に、毘沙門天巡りのガイドを頼まれた時、写したもの

です。ちなみに奈良の春日大社(768年、藤原不比等の創建)は、茨城県の鹿島神宮から分祀、そのお使いが鹿です。

【だまことだま】 H20・6・7

岡山県瀬戸内市 小田 弥 市
 拝啓 梅雨空のつとつとしい日々がつづいています。先日はおおぜいで、折角の御来園(長島愛生園)をいただき乍ら充分なおもてなしもできず、すみませんでした。

中野先生に教えていただいた私の下手な碁を、棋譜して下さつて、お送り下さいまして有難う御座いました。先生のサイン「広くまろく」を心に抱き、精進をしたいと思つています。私も大分歳を重ねてきておりますが、人間は最後まで勉強ですね。

皆様に園内のそのままの姿を見ていただき、理解をして下さり深く感謝しております。又機会がありましたら、いらして下さい。

皆様にどうぞよろしくね。 敬具
 杉本順一様へ

第300回 大倭会文化行事

秋の一泊旅行のご案内

—能登半島に海の神を訪ねる—

皆さん、お誘い合わせて参加ください。

- 月 日：平成20年 **10月26日**(日) ~ **27日**(月)
- 行き先：能登半島 和倉・輪島方面 (気比神宮・千里浜海岸・輪島朝市など)
- お泊り：和倉温泉(未定)
- 問合せ：湯浅芳郎 (電話090-6987-5847)

立教開宣祭と東光大祭・祖霊祭

日時：平成20年 **8月15日**(金曜日)

*午前11時より

大倭神宮にて立教開宣祭

*午後1時20分より

東方の碑 拝礼所にて

*午後2時より

大倭大宮拝殿にて東光大祭

奥津齋庭にて祖霊祭

■立教開宣祭とは 「昭和二十年八月十五日は誰もが知る、日本が大東亜戦争に敗れた記念日である。この時大倭教は神命降下によつて旗印をかかげ、立教開宣したのである。」(野草社刊『やわらぎの黙示』216頁) この日を記念するお祭りです。

■東光大祭とは 昭和二十一年旧七月十五日夕刻、現大本宮の東方の碑前あたりで法主様が農作業中、瑞光が天にあらわれて、天の声「黎明は訪れたり東方の光 大法は立てり大倭太加天腹」が聞こえ、宗教活動の本宮が現在の大倭紫陽花邑であることを示されたのを記念する大祭です。

■祖霊祭とは 大倭にご縁の皆さん方のご先祖諸霊を始め、それぞれにご縁のある諸霊を鎮魂慰霊するお祭りです。日頃霊界では互いに会えない霊人たちもこの日は会う事を許されるお祭りの日です。

当日夕方六時ごろに東方の碑あたりで満月の出を待ちながら東方瑞祥について考えてみませんか。直会も用意されます。どなた様もお気軽にご参加ください。

寸 莎

第80回

山上 憲一さん

畑で楽しむ

今回登場してもらう山上憲一さんは、大学一回生の時にF I W C関西委員会の交流の家建設ワークキャンプにかかわりはじめた。現在は、高校教師を辞めた後、無農薬で米や野菜を作り、ワークキャンプの若者達の援農を受け入れたりしている。「畑にいると本当に楽しい」と語る表情が印象的だった。

山上さんは一九四六年、終戦の次の年の二月七日に、三人姉弟のまん中の子として大阪で生まれた。「父を早く亡くし、女手ひとつで育てられたことが、自分の人格形成に大きく影響している」と語る。

小学校へ上る前の忘れられない体験がある。「祖母が亡くなった時に、火葬場の窯を親戚の人が抱き上げて覗かせてくれた。その時の記憶から、その後長い間、人はこのように肉体



を焼かれること、アツイ・アツイとまるで今現在、自分の生身が焼かれているように感じて、畳の上をころがり廻り身もだえする恐怖にしばしばおそわれた」というのだ。中学生になると、それは「この自分という存在が消滅すること、いわば自我消滅の恐怖と形を変え、二十歳を過ぎても、《死の恐怖をどう乗りこえるか》が深刻なテーマだった」という。小さい頃から文学好きだったので大阪大学の文学部に進学したが、「入学してすぐに、学問としての文学は自分で愛好している文学とは全く違う味気ないものだ」と気づいて、スランプにおちいった」と苦笑する。そんな折、「学内で配られたF I W Cのピラを読んで面白そうだと直感して」、交流の家建設の週末キャンプに行ってみた。

参加してみると、「今まで体験したことがない世界で、色々な変わった

人達が一緒に汗を流してタダ働きをし、同じ釜のメシを食う体験は新鮮だったのだ、それ以来ワークキャンプにのめり込んだ」という。時は一九六四年五月のことで、ハンセン病回復者の宿泊施設である交流の家建設予定地はまだサラ地で、本格的な建設がはじまったのは夏休みの長期キャンプからだった。

ブロックを五段目まで積んだ八月九日、その日はオープンデーで、ほとんどのキャンパーは木津川に水遊びに出かけていたが、山上さんは残ってブロック積み込みの仕事をしていた。「交流の家建設に反対する地元の人達がドヤドヤとやってきて法主さんに建設中止を談判していた。その日以来、工事の中断、地元への説得、設計のやり直しなど、さまざまな紆余曲折があったが、先輩のキャンパー達のねばり強い言動には深く感心させられた」と当時をふり返る。大学には一年の休学期間を含めて五年在学したが、「大学へ行くより交流の家にかわることの方が多かった」と笑う。

大学卒業後、大阪で公立高校の国語の教師になり、四つの高校で、計三十二年間教師生活を送った。「授業では日本語を大切にしよう」と、朗読に特に力を入れた。色々反省点はあるが、全体としては人並み以上の

仕事はできた、それなりに自負している。それも今となれば前世の出来事のようにだ」と静かに語る。

一九七四年に故柴地則之さんの末妹の紀久子さんと結ばれ、奈良県の平群町で住むことになり、現在はそこで農業を営んでいる。

農業をはじめたのは二〇〇一年に五十五歳で教師を辞めてからのことである。「偶然的なりゆきから昔のキャンパー仲間の青谷夫妻に背中を押されて、富田林で一反の田んぼを借り、農業の手ほどきを受け、三年目から地元の平群でも野菜の有機栽培と会員制の宅配をはじめた」と着実である。「まずは自分達家族が食べるものを基本にして栽培し、余ったものを二十軒ほどの会員さんに宅配している」というが、心のこもったカラフルな宅配通信をママに出している。

「農業をはじめて、さまざまな人との出会いによって自分が自然と好ましい方向に導かれるのを感じる。《一期一会》という言葉の深さを感じみじみと実感できるようにした。今は、引き込みりの人とか知的障害のある人も一緒に農業を中心とした生活をする一種のコミュニケーションのようなものをつくりたいという夢がある」と明るい表情で語ってくれた。

(聞き手) 岸田哲

あじさい日誌

6月15日 大倭神宮月次祭

6月19日 大倭病院の守護霊東山坊大善神のお社周辺の枯れ松などが業者さんによって清掃されました。

6月21日 夜、交流の家でF1 WC 定例委員会。7月5～6日、今夏の韓国・中国キャンプのメンバーが日本のことも知らずと、長島愛生園・邑久光明園訪問を企画しました。

6月22日 第299回大倭会文化行事。雨模様の天気でしたが、玩具のコレクションなどの宮本順三記念館には参加者13人と子供2人(すこく元気遊びました)。樋口(旧姓宮本)須賀子館長は交流の家建設当時のキヤンパーで、その頃の大倭の思い出を語ってくれました。司馬遼太郎も来たというお店の昼食

も好評で、その後、司馬遼太郎記念館へ。参加者は17人に増えユニークな顔ぶれだったので自己紹介をして入館。それぞれのペースで見学しました。写真は司馬遼太郎自筆の歌碑。



野保夫さん写

6月23日 大倭大本宮月次祭

この日は昭和38年6月23日月次祭の法話をお聞きしました。

6月26日 東方碑の所で恒例のあじさい祭。有志の皆さんが茶菓の接待をしてくれました。長曾根寮ショートステイ利用・吉岡重郎さんの短歌、「混

濁の世から一刻離れいて 紫陽花賞でこの幸せよ。
八重垣園の和田スミ子さんの写真、「墨田の花火」。



6月27日 「平和祈念行脚」の協力依頼で辻本上人が来邑。

午後、熊本大学で研究をされている医師市村隆也さん来邑。

6月29日 大雨の予報で中止かとも心配された田んぼの草取りでしたが、時折の小雨位で、参加者も8人と少人数にしては午後1時半頃には終了して、思いの他順調。6月15～18日、中野英樹さん(栃木県)が来邑、草の小さい内に使うと有効だからと自分の考案した道具で草取りをしてくれたお陰です。

7月6日 大倭神宮月次祭

夜、大倭会館で邑倭の会

7月7日 町田市の観星さん、名古屋市の春田和美さん来邑。

7月8日 梅雨の合間、蝉が鳴き始めました。

昭和7年7月7日生まれ、満76歳の中村昇次さんが7人の皆さんに囲まれ、創作料理の「風に夕食会。永遠に夢多き青春時

代の昇ちゃんです。

7月10日 午後、「2008平和祈念行脚(東京)広島」行進中の日本山妙法寺の一行が来

邑。交流の家に一泊されました。



大倭安宿苑では

6月14日 第30回大倭安宿苑卓球大会を開催しました。

6月18日 合同防災訓練実施。

(菅原園)

6月14日 ご家族主催の音楽会でリズムに乗りました。

(須加宮寮)

6月26日 お楽しみ外出で15名の住死者が通天閣と天王寺動物園で楽しんできました。

(長曾根寮)

6月13日 音楽クラブ。大正時代の歌を、体操を交えながら歌いました。

6月17日 (デイサービス)「桃太郎」と「花咲き山」の紙芝居。

(八重垣園)

6月23日 外出支援で6名の方が大安寺(竹供養、がん封じ夏祭り)へ出掛けました。

投句箱より、「暑氣払つみ寺ののぼり鮮やかに」

俳句の風物 上田森彦(98歳)

朝顔やおもひを遂げしごとしほむ 日野草城

早朝、鮮やかに開いた濃紺の朝顔がもうすっかり萎れきっている――その姿は力一杯咲き得た喜びに似て愛しい。

朝顔の青ばかりにも深い青 森彦

(茂毛路園)

7月7日 七夕の集いコンサートが行われました。

あんない

* 月次祭(大倭神宮)

8月6日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会主催第四七六回禊会

8月10日(日) 午前9時より大倭大本宮境内の清掃神事として行います。

なお大倭墓地清掃を午前8時から行います。

* 大倭教立教開宣祭

* 東光大祭及び祖霊祭

8月15日(金) 今年はこの日が旧暦7月15日に重なりました。詳しくは6頁をご覧ください。

* 月次祭(大本宮)

8月23日(土) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

* 大倭会主催弥栄おどり

8月30日(土) 午後7時30分より。上欄をご覧ください。

大倭会主催 弥栄おどり

平成20年8月30日(土曜日) 午後7時30分より大倭西斎庭

今年のおどりは8月最終土曜日となります。老いも若きも、男も女も心をついに、霊界人と共に楽しく踊って、日頃の疲れやストレスを発散しましょう。

求む!

準備・後片付け等のお手伝いをしていただけるスタッフ

当日お手伝いいただける方は、大倭西斎庭へ午前9時にお集まり下さい。

お問い合わせは：青山法義まで
Tel 080-3803-7500